

再現屋、産声を上げる Ⅱ

16 アイスクリーム

志乃の魔女疑惑？に気持ちを整理できないまま、オレは社用車をアパート裏手に止めると、塀越しに自分家^ちの様子を伺った。またぞろ後輩さん達が押し掛けてるんじゃないかと危惧^{きぐ}したが、今夜は電灯の明かりも揺れておらず、静かだった。

「ただい……おわっ」

玄関の扉を開けた途端、濡れた物が顔にぺタリと張り付いてきた。思わずのけぞって逃げたオレは後頭部を扉に打ち付け、三和土^{たき}にうずくまった。よくよく災難続きの頭である。

「おかえりー」

志乃の声が奥から聞こえてきた。オレは頭をさすりながら顔を上げた。

台所には幾本ものロープがあらからこちらへと渡されており、十重^{とえ}二十重^{たえ}に洗濯物が干してある。さつき眼前に迫った物体はオレのナマ乾きパンツだったのだ。

「これは……」

志乃がテーブルを伝いながらやってきた。

「足の調子もだいぶ良おなったし、これぐらいさせて

もらわんと罰^{バチ}当^{おも}たると思^{おも}てな。洗濯機^{のぞ}覗いたらエライ溜^おま^もつてたからねー」

「す、すまん」

一応礼は言^のつたものの、暖簾^{のれん}代^りにアレではご近所の体裁が悪い。

「こんなに大変だったろう。無理しない方が」

「ノンノン。あの子らがほとんどやってくれたよ。洗^うんから干^すんまで」

「ええ!？」

うら若き乙女たちが喜々として下着を干すの図。

「今日はお陽^ひさん出^でてなかつたから、部屋干し&ストーブ^た焚^たきっぱなしでしたー。そんなことよりそこに座^{すわ}つて。今日はまたまた御馳走^{ごちそう}やで」

志乃は足を庇^{かば}いながら皿を出し、鍋からホカホカと湯気の上がるシチューをよそってくれた。

食後にはさらにデザートまで出た。

「スペシャル・ヘルシー・アイスクリーム。これもあのコらが作^{つく}ってきてくれてん。カロリー低いし糖分控^{ひか}え目。疲^{つか}れた体にはタマらんでー」

帰宅したら開口一番、^猫の^{こと}を訊^{たず}ねようと思^{おも}つていたオレだったが、完全に機先^{きせん}を制^{せい}されてしまった。

どうあがいても志乃のペースからは逃^にげ^がられないようだ。

「このレシピもな、あたし製^{せい}やねん。アハハ」

自慢げに笑うその顔は、まことに屈託がない。

冬の夜、暖かい部屋の中で食べるアイスクリームは、妙に気持ちを落ち着かせる。オレは志乃に猫の話をするのを止めた。元々は彼女の寝言だ。問われても返事に窮するだけだろう。

それでも確信はある。あれは間違いなく予言だ。オレは二度までも志乃に助けてもらったのだ。

彼女は大きなカップを抱えて、口中いっぱいアイスに頬張っている。

「んー、グラシャス」

「デリシャスだろ？」

オレはやれやれと吐息をつき、テーブルに目を落とすと、そこに置かれた郵便物の束に気づいた。

「これは？」

「アンタ、ここんところポスト見てなかったやろ？^{あふ}溢れそうになってますーて後輩さんが持ってきてくれやったよ」

「そっか。なんか慌ただしかったからなあ」

ほとんどは宣伝チラシや広告DMだったが、一通だけそうでないものが混じっていた。オレはすぐさま開封した。

中に入っていたのは一枚の案内状だった。それを見た瞬間、オレの体を、天啓にも似た衝撃が刺し貫いた。

オレの様子がよほど不審だったのだろう。志乃が顔を寄せてきた。

「なんか悪い知らせ？」

オレはかぶりを振った。

「志乃さんはやっぱり予言者だ」

17 俊郎の家族

きよとんとしてる志乃に対してオレはテーブル越しに身を乗り出し、興奮気味にまくし立てた。

「西だよ西。アンタ言ったじゃないか。オレの運氣が上がるって。西を目指せば」

しかし彼女はスプーンをくわえたまま、眉をひそめるばかりだ。オレは彼女の抱えるアイスカップの横に開封したばかりの案内状を広げた。

「ばあちゃんの三回忌を盛大にやることになったらしいんだ。だから出席しろってさ」

突然、志乃は両目をギュツとつぶると、身体を縮めた。

「ど、どうした？」

「……アイスが凍^ひみた」

キーンと顔に書いてある。彼女は眉間を指で押さえながらじつとそれに耐えている。その表情がおかしくてオレは思わず吹き出した。

「笑わんほつてよ。舌がまわらへんねんから」

「わかったわかった」

オレは志乃が落ち着くまで待つと、居ずまいを正した。
「どこから話そうか。えーっと、オレの母方の実家が大阪にあつて、オレはじいちゃんとはあちゃんに育てられたんだ。ばあちゃんは三年前に亡くなったけど、じいちゃんは今でも健在さ」

「アンタのご両親は？」

「お袋はじいちゃんの娘なんだ。でも親父との結婚を反対されて夜逃げ同然で家を飛び出した。じいちゃんは『勘当だ！』と宣言したらしいけど、お袋はじいちゃんの一番のお気に入りだった。親父が事業に失敗したとき、見かねたじいちゃんはオレを引き取ってくれた。オレの両親は再起を賭けて渡米したまま、今も向こうにいるはずだ」

「へえ。ハッホええやん」

「そんなモンじゃないって。ここ数年音沙汰なし。どこでどうしているのやら」

オレも自分のアイスを一口舐めた。キーン。

「親と離ればなれになっても、大好きなばあちゃんと一緒だったら平気だった。じいちゃんは口は悪いけど、愛娘の一人息子ってことで大事にしてくれたんだと思う」
「フンフン」

「じいちゃんは一代で会社を大きくした立志伝中の人物さ。子供たちも幸い有能な人ばかりだったから、能力主義一点張りのじいちゃんのお眼鏡にもなんとか適って、みな重役の席に納まってる。そして五年前じいちゃんは長男に社長の座を譲って会長に退いた。そこまではよかった。でも」

「おばあひゃんが亡くなりはって」

「そう。険悪な親子関係が表面化したんだ。元来ワンマン社長だったじいちゃんが、あれこれくちばし嘴を挟むからいけないんだよ。それでもおばあちゃんが生きてた頃はなんとかまとまってた。おばあちゃんはそれは人徳のある人だったんだ。会社を支えた陰の功労者。裏社長なんて呼ぶ人もいた。でも経営に関しては全くの素人でノータッチだったんだけどね。それではおちゃんが亡くなると、じいちゃんのわがままを抑える人がなくなった。親子間の溝はますます深まった。叔父さんらが屋敷に怒鳴り込んでくることも度々あったらしい。この辺りは噂で聞いた限りだけど」

「はれまー」

「おあちゃんの葬式の席上でも激しい応酬があったそうなんだ。おあちゃんが死んだのはじいちゃんのせいだと罵声ばせいを浴びせた叔父さんもいたらしい。東京にいたオレも知らせを受けて帰阪してただけど、棺桶かじに齧り付い

てわんわん泣いてばかりいたのでよく知らない」

照れ隠しにまた一口アイスを頬張った。

「それからさ。事あるごとにオレに実家へ戻って来いと催促するようになったのは。ああ見えて、寂しいんじゃないかな、じいちゃん」

オレはカップをテーブルに置いた。

「だからこの際、大阪に帰ろうと思うんだ」

18 一大決心

「は、帰るはえる〜!?」

志乃は口からスプーンを引き抜くと、アイスの上に突き立てた。

「あんらほれっへほうひようふへるっへいふほほはいは、はあ」

「あー何言ってるかわかんねーよ」

オレは立ち上がってコーヒー茶碗を二つ用意すると、ポットのお湯で手際よくインスタントコーヒーを入れて二人の前に置いた。そして彼女を促し、しばし互いの喉を温めた。

志乃はすーっと息を吸い込むと、鋭い眼光とツバを最大出力にしてオレに浴びせかけた。

「アンタそれって東京捨てるっちゅうことかいな、な

あ！」

「そう言いたかったのか」

「上京した時、夢や希望に胸ふくらませてたんと違ούν？ そんな簡単にあきらめてええん？ 女に逃げられて、仕事のひとつ無くなっただくらいで尻尾巻いて家族のところへ戻るやなんて情けないわ！」

彼女は覆い被さるおおようにオレに迫ってくる。

「なっ……何を言う！」

オレも負けじとテーブルに両手を突いた。

「オレのこと何も知らんで勝手なこと言うなよ！この不況の中、夢やら希望なんて邪魔なだけなんや！ 今の仕事かてコンピュータが導入されりゃ吹っ飛ぶような代物だ。つまるところ、あー」

「なに!？」

「つ、つまりオレには東京の水は合わなかったってことなんや！」

すると志乃はフフンと身体を反り返らせた。

「そうやって言い訳、繰り返すわけ？」

「な、なんだと？」

「暇やったからアンタの本棚、覗のぞかせてもろたで。あの映画の本の山はなんやの。ハウツー本やら解説本やら。アンタのまとめた卒論も読んだ。難しいことはわからへんけど熱かった。むちゃくちゃ熱かった！ 公開するた

びに観に行った映画を自分で評価したレポートも書いてりしてるやん。あたしは読んでおもしろいと思った！ アンタの夢って、映画と違うん？」

「そ、そうや、映画を作るのがオレの夢や」

「ほなら大阪へ帰ったら映画作れるん？ 向こうでどないする腹づもりなんか、ちゃんと言うてみいや」

「それは……大阪には学生時代に培^{つちか}った人脈がある。土地鑑もある。オレの庭や！」

「そやからどないやつちゅーんよ」

「だから、こ、今度こそ本物の映画を作ってみせる！

誰も文句言えんようなスゴい作品を作って、発表してやる！」

「そう」

突然、志乃は声のテンションを落とすと、立ったまま腰に手を当てて俯^{うつむ}いた。

「わかった。あたしも付いていく」

「えっ？」

「アンタは流されやすいタイプやから、ちゃんと締^しめる人間が側^{そば}で支えたらんと、絶対うまいこといかへん。その役目、あたしが引き受けたろう言うてんねん」

「……」

「その代わり!!……さっきの気持ち、忘れたらあかんで!!」

「あ、ああ……てことは、志乃さんも大阪に一緒に帰るってこと？」

「当たり前やんか」

「は、ははは」

「まあ椅子に座りーや」

すでに志乃はこぼれるような笑顔に戻っている。豹変の次は猫変か。

「これからの計画が決まったところで、ビールで乾杯しよ。それにしてもアンタ興奮すると関西弁、ところどころ混じるなあ。ちよつと安心したわ」

19 お願い

その夜、隣室からは心なしか、前夜以上に気持ちよさそうな寝息が聞こえてきた。オレはまた台所の狭い空間に置かれたソファに寝転がって、まんじりともせずに天井を見つめている。

結局、予言については話題にしないままだった。二人揃って大阪へUターンすることが決まると、妙にハイテンションになって、後はバカ話のオンパレード。最後は二人見事に酔いつぶれた。

でもこうやって横になると、頭の中が冴^さえ冴^ざえとしてくる。オレはやはり「西を目指す」^{イコール}「大阪に帰る」

「運が開く」だと信じている。これ以上東京で燻^{くすぶ}っているより、大阪でやり直すのが正しいと確信している。決して夢破れての都落ちじゃない。ましてやオレの考えが負け犬の遠吠えなわけではない。根拠？ それは志乃の存在。彼女の存在は理屈を超えて、オレの中に居座っている。家を半分占領されているように。でもなぜかそれが自然の流れであるようにも思える。これが運命か。いやいや運命などと軽率に言うべきじゃない。

とにかく明日も仕事だ。早く寝よう。

かすかに志乃の声がした。おいおいもう寝言はご勘弁。気になって眠れないじゃないか。

多少寝不足気味だが、今朝も午前六時の起床。と思つたらカチャカチャという皿の擦れ^{こす}合う音がする。

「おっはよーさん」

「……アレ、志乃さん、どうして」

「いつも朝食が食パン一枚じゃいけません。目玉焼きと野菜サラダ作ったから、食べてって」

オレは感動に涙を流しそうになったことを告白しなくてはない。顔を洗って食卓につくと、挽^ひき立てのコーヒーの香りが部屋中に充満している。ああなんたる幸せ。今なら食前のお祈りだろうが踊りだろうが何だつてするぞ。

オレは久しぶりに満ち足りたブレックファストを過ごし、おもむろにネクタイを締め、上着を着た。

「なあなあ、トシー」

志乃がすり寄ってくる。はて、いつからオレはトシと呼ばれてたっけ？

「お願いがあるんやけどー」

「な、なんだよ、その上目遣いは」

「毎日、車で帰ってきてる言うてたやんかー」

「ああ、すぐ裏手の塀沿いに止めてるんだけど」

「今夜も乗って帰る？」

「そのつもり」

志乃はさらに擦^すり寄る。

「じつはねー、運んでほしい荷物があんねん」

「荷物？ どういう」

「それはまた後で話すわ。そやから今夜はできるだけ早よお帰ってきてな。お願い！」

まるでいたずらを見つけた子供が謝るように、彼女はオレを拝んで見せた。

「了解りよーかい」

今日の朝食は、お願いの伏線だったのかな。

この日は殊の外、段取りよく仕事を片づけることができ、帰宅したのは午後五時だった。車をアパートの表側

に乗り付けると、すぐに志乃が飛び出してきた。まだ若干足をひきずっているものの、かなり快方に向かっているようだ。そのまま助手席側のドアを開けて、乗り込んできた。

「おかえり。さあレッツ・ゴー」

「休む間も無しか。で、行き先は？」

「道案内するさかい、まずは発進じゃー」

到着したのは都内の一角を占める高級マンションだった。車から降りたオレは口を開けたままその偉容を見上げた。五十階くらいあるだろうか。

志乃はさっさと入口に向かうと、鍵を取り出し、セキュリティも物々しげなスライドドアを、いとも簡単に開けて見せた。

20 異世界

音もなく開いたドアの間を、志乃は平然と進んでいく。
呆氣にとられて眺めていたオレは、閉じかけたドアにあわてて飛び込んだ。

そこはホテルのロビーのような、ちよつとした空間になっていた。そこかしこに配置された間接照明に浮かび上がる高級感漂う壁面。さりげなく置かれた趣味のいい

鉢植え。向こうにはサロンと呼べそうな、いくつかソファが置かれたコミュニティスペースまである。オレのような庶民の目には、ここは高嶺^{たかね}の花どころか異世界。住んでいるのはエイリアンたち。

「こっちやでー」

おたおたしていたオレは、その声にすがるように振り返り、エレベータの前に立つ彼女の側へと駆け寄った。

「な、なあ、こんな五十階もある超高層マンションにどんな用事が……」

「そんなにあらへんよ」

志乃の指さすエレベータの回数表示を見ると、数字は“25”までしかなかった。庶民からすれば五十も二十五もたいして変わらない。

「そ、そうだ。なんで鍵なんか持ってるの？」

「しーっ」

志乃が唇の前で人差し指を立てるのと、二機あるエレベータの片方の扉が開くのが同時だった。中から降りてきたのは、全身これブランド物でまとめましたと言わんばかりの母親と小学生ぐらいの子供だった。コンバンワと愛想よく言葉をかける志乃と、異星人に遭遇したような顔のオレに母親は不審げな一瞥^{いちべつ}を投げ、毛皮のコートを大仰に揺らしながらドアをくぐって出ていった。あの親子の目には、Tシャツ、ジーンズに安物ジャン

パーといういで立ちのオレらの方が、よっぽど異星人かもしれない。

夕闇の中へ消えていく親子を眺めていると、志乃にエレベータの中へと引きずり込まれた。

彼女の押した階数ボタンは“23”。扉は静かに閉まり、二人を乗せた箱は上昇し始めた。

「このマンションに知り合いがいるのか？」

「ん……まあね」

「教えてくれよ。心の準備が」

「ま、到着したらね」

とりつく島がない。あきらめて壁にもたれると、扉がサツと開き、志乃は降りていった。あわてて表示を確認すると、もう“23”。なんちゅう速さだ。ワープでもしたのか？

そこは左右に伸びる廊下になっており、志乃は迷うことなく右側に歩を進める。オレも続く。

また住民と鉢合わせするのではと心配したが、誰に会うこともなくオレたちは、ある扉の前に到着した。

“2329”。表札は出ていない。

志乃は呼び鈴を押したりせず、再び鍵を取り出すと鍵穴に差し込んで回し、扉を開けた。

入ってすぐの三和土^{たたき}、いやエントランス脇には、シューズインクロークなるものが存在して早速オレの度

肝を抜いた。志乃はスリッパを取り出し、オレに履かせると、先に立ってフローリングの廊下を歩いていく。遅れじと後を追う。

「ここでちよつとの間^ま、くつろいでて」

到着した部屋を見て、オレの頭の中はもう質問が浮かぶどころか、大きな白旗が翻^{ひるがえ}っていた。

二十畳はあろうかというリビング・ダイニングルーム。しかもカウンター付きだ。天井は高く、ゆったりとした室内に安置された家具や調度類はどれも高価そう。最も驚いたのは、部屋の形が三角形になっていて、斜辺の部分は全面これガラス張り。そこからの眺望は、宝石を散りばめたような東京の夜景。まさにVIPルーム！

振り向いたオレに、志乃はようやく重い口を開いた。

「そう、ここはあたしン家^ち」

オレの頭はどうとうフリーズした。

21 謎のマンション

視界がぐるぐると回転した。倒れるまいと側^{そば}のテーブルに手を伸ばすと、ガラスの天板が電灯をキラリと反射して「指紋で汚すな」と威嚇^{いかく}したように思えたので、思わず手を引っ込めた。

志乃が何か話しかけているが聞き取れない。オレは何

とか両足を踏ん張った。ふいに足許が暖かくな^{あしもと}った。志乃が床暖房を入れたらしいが、このときはそんなことから認識できなかった。

志乃はオレに近寄るとドンと胸を押した。オレはバランスを失い、ソファに深々と腰を落とした。……あぁなんて座り心地がいいんだ。我が家でベッドと化しているデイスカウトショップのソファとは雲泥の差だ。

「これ飲んで、休んでて」

ガラスのテーブルに水割りが置かれた。音楽が流れてきたので目をやると、巨大なプラズマテレビが歌番組を映している。オレは水割りのコップを掴^{つか}むと、一気に^{あお}呷った。

ようやく人心地ついたので、オレは状況を再確認する気になった。立ち上がって窓に近寄ると、夕闇に天王洲アイルや東京タワーを見分けることができた。昼間ならきっと富士山が見えるだろう。

こんな一等地の高級マンションを志乃は自分の家だと言った。本当だとすれば、最初に出会ったときの言葉「帰るトコない」に矛盾する。どういうことだ？

ここまで圧倒されっぱなしのオレだが、もう我慢の限界だ。意を決して彼女の方を振り向いた。

「なあ、この家は……」

すでに彼女の姿はリビングになかった。オレはあわて

て廊下との間のドアに向かったが、そのとき冷蔵庫の表面に貼られたカレンダーが目に入った。近寄るとそこには細かな字がビッシリと書かれており、どれもがアルバイトの予定だった。脇には数枚の写真がマグネットで留められてあり、バイト先でのスナックらしく、焼き肉屋やハンバーガーショップの店員と思しき服装の志乃が、おどけた顔で友人らと一緒に写っていた。

このマンションに志乃が住んでいたことは、どうやら動かしようのない事実らしい。それじゃどうして嘘をつかなきゃならなかった？

オレはフロアリングの廊下に出ると、志乃の姿を探し求めた。扉は左側の壁面に沿って三つ。その一番奥が開いており、がさごそと音がする。

「なあ、志乃さ……」

オレは言葉を途中で飲み込んだ。そこは大きな寝室で、これまた大きなベッドが中央にデーンと鎮座^{ちんざ}している。

志乃はその上に山のような衣類を広げて、忙しく畳んでいた。

「なんやー待ってとってくれたらええのに」

「いったい何してんの？」

「何てご覧のとおりよー。大阪へ帰るて決めたから、荷物まとめてるんやないですかー」

確かにカーペットにはトランクが口を開けており、T

シャツや下着などが詰め込まれている。

オレ一人悩ませて、いったいこの女は……!!

とうとう堪忍袋の緒が切れて、オレはベッドを両手で強く叩いた……つもりだったが、過剰なほどの弾力性がオレの身体を前のめりに一回転させ、志乃の目と鼻の先に尻から着地した。

「すごい。体操選手みたいや。パチパチパチ」

オレはカッとなって、さらに詰め寄った。

「いい加減にしてくれ！ さあ説明！ なんで家があるのに無いってウソついた？」

「ああ……えーつとね、あたしはココに住んでたけど、住まわせてもろてるだけやねん」

「誰に？」

オレは志乃に話を脱線させまいと、単刀直入に質問を続けた。志乃は俯うつむいたまま答えた。

「あたしの、彼氏」

か、か、か、か、か。

「彼氏って、それはどういう……」

そのとき玄関の方でガチャリと音がした。

22 予期せぬ侵入者

「おーい、わしだ」

拡声器でも使っているのか、侵入者の大きな声は廊下に響き渡り、スリッパのパタパタという音が近づいてきた。志乃は声に弾かれたように立ち上がると、手の中のパンツをオレに押しつけ、寢室を飛び出していった。

“彼氏”の登場だ！……それじゃオレの立場はどうなる？ このままじゃ間男と勘違いされてしまう。どうしよう。

とにかく身を隠すしかない。オレは寢室の中を見渡した。部屋の隅の洋服ダンスが開いていた。それはウォークインクローゼットになっていて、奥の奥まで値の張りそうな洋服がこれでもかと並んでいる。隠れるには絶好の場所だ。

「おお、やっぱり志乃ちゃんか。よう戻って来てくれた。わしゃうれしいぞ」

「あんた京都で撮影の日いと違うの？」^{ちゃ}

「わはは、わがまま言うたった。東京のスタジオでも撮影できるじゃろーてな」

クローゼットに入りかけたオレの足が止まった。男の声に聞き覚えがある。まさか。

オレが廊下に顔を出すと、志乃が男の背中を押しながら、リビングに連れて行くところだった。逆光で侵入者の人相は判別できない。よほど気分が高揚しているのか笑い続けている。オレはその笑い声に吸い寄せられるよ

うに廊下に一步出た。

「志乃ちゃんはきつと戻つてくると信じとつた。だから東京から離れないようにしてたんだ。毎日撮影が終わるたんびにココに来とつたんだぞ」

快活に喋り続ける男の正体は今や明らかだ。オレはコーナーから彼の横顔をそつと覗き見た。

白いものが混じつた短髪の下の彫りの深い顔。柔和そうな目と独特の鷲鼻。顎髭が年齢を分からなくしているが、まだ五十代前半のはず。全身をアルマーニだかどこだかで仕立てたスーツでキメた長身瘦軀はまさに絵に描いたような役者。

高堂儀作^{こうどうぎさく}。彼を主人公にして撮られた時代劇映画やドラマは数知れない。まさに今の日本映画界を支えるドル箱スターだ。まさかこんなところでお目にかかれるなんて。ビデオカメラがないのが残念だ。オレは久しぶりに撮影魂が身内に燃え上がるのを感じた。

男をソファに座らせると、志乃は後ろを向いて舌打ちした。先ほどの発言といい、彼女は高堂の登場を予測していなかったようだ。いや彼の東京不在を突いてのマンション訪問だったのだろう。なんとなくホツとした。だがこの状況はどう展開するのだろう。

「ギイちゃん、あたし大阪に帰ることにしてん」

「そうか。じゃあ京都にでも新しいマンションを買って

やろう。その方がわしも都合がいいしな」

「そやない！ わたしもう不倫はイヤやねん！」

なんて分かりやすい会話だ。ほぼ現状が把握できた。さすが一流役者と役者くずれ。

いや違う。志乃は耳をそばだてているオレを意識してるんだ。説明の要を省くために。

しかし互いの呼び名がギイちゃん志乃ちゃんとは。二人の付き合いは短くも浅くもなさそうだ。

「この前フライデーされとったやろ。若い女と深夜に銀座歩いてるとこ」

高堂は内ポケットから煙草を取り出すと、粹な仕草で火をつけ、天井に向かって煙を吐いた。

「志乃ちゃん、わしの商売は知ってるだろ？ 老若男女を問わず、さまざまな人間がいろんな話を持ってくる。中にはいい話もあり悪い話もある。判断するには耳を傾けなくちゃならん。相手が若い女性の場合もあるうさ。それに今に始まったことじゃないだろ？」

志乃は決然と顎を上げると高堂に向き直った。つかつかと歩み寄り、高堂のくわえる煙草を左手で抜き取ったかと思うと、右手に反動をつけて、高堂の頬を力まかせに張り飛ばした。

しかもグウだ、グウ。

23 対決

それは誰も見たことも想像したこともない光景だった。天下御免の時代劇ヒーローが女に殴り飛ばされたのだ。宙に舞った高堂儀作こうどうぎさくは座っていたソファをひっくり返し、床の上に背中からドスンと落下した。

嗚呼ああドウシテオレハビデオカメラヲモツテコナカタノカ。このシーンをダビングして売れば一本数十万円は稼げたことだろう。くやしい。

いやそんな話はどうでもいい。相手は芸能界一のセレブだ。乱暴を働いてタダで済むのか。

「このアホ、ヒトの気も知らんと！」

志乃は握った拳をそのままに倒れた高堂へさらに襲いかかろうとする。

ヤバい。そう感じたオレは反射的に飛び出し、志乃を背後から抱きとめた。志乃はジタバタと暴れたが、顔をオレに向けると、

「あ、アンタおったんや」

なんだ忘れられてたのか。それじゃ、あの説明口調の会話って……役者のすることは判らん。

志乃の鼻息はなかなか治まらない。そうしてるうちに倒れていた高堂が上体を起こした。しまった、オレは自分の立場をどう釈明すればいい？

高堂は唇から僅かに血を流している。もしあのトレードマークの鷲鼻をへし折ったりしていたらどれだけ慰謝料を取られたか。そんな心配をしていたオレはひとまず安心した。

高堂は口許の血を指で拭うと、片膝ついてすつくと立ち上がった。その所作はさながらドラマを観るような水際だったもので、オレの目には高堂と彼の十八番『栗太郎侍』がダブって見えた。

「君が志乃の新しいオトコか。玄関に靴があつたので気づいていたよ」

「そういうアンタにとって、あたしはここで何人目の住人!？」

そう叫んだ志乃はオレの腕の間を滑り落ちると、そのまま床にくずおれた。

無言の間が空いた。

テレビから流れるCMがそらぞらしい。オレはサイドテーブルに近づく、床に転がっているテレビのリモコンを拾い上げてオフにした。

志乃の表情は、髪が陰になって読みとることができない。

おそるおそる高堂を見やると、彼の顔には明らかな疲れと憔悴が浮かんでいた。およそヒーローには縁遠い表情だ。オレはようやく彼の中で志乃の存在が大きいこと

に思い至った。

「あの、私は、志乃さんに頼まれて引越しのお手伝いに来ただけです」

高堂はオレの言葉に、にっと力なく笑うと軽く手を挙げた。そして再び志乃に顔を向け、優しい眼差まなざしで口を開いた。

「志乃ちゃんが三日前、書き置きを残していなくなったときね、わしスゴく心配したんだよ。まるでそのまま死んじゃうような文面だったもんな。口の堅い探偵を雇って、ようやく今朝居所がつかめた。そこの彼だろう、男のアパートにいと連絡があつたんで、そのまま尾行してもらってた。だからこうして今、志乃ちゃんと再会できたんだ。

……最後に一言、ありがとうを言いたくてね」

高堂は手を後ろで組むと、遠い目をして話を接いだ。

「確かにこの部屋に住まわせた女性は君で五人目だ。でも君のようにちつとも喜ばなかった女性は初めてだな。ましてやプレゼントした服は着ない、金ならいくらでも都合すると言ってるのにバイトはする。君は……かなりヘンだよ。ハハハ。

でもね志乃ちゃん。君ほどわしを癒してくれた女性はいない。君といた五年間ほど充実して仕事のできたことはない。これは本心だよ。……でもわしは家族を捨てら

れなかった。済まん」

高堂は、床に女座りしている志乃の側に寄り、彼女の旋毛つむじの辺りを軽く撫なでると、そのまま振り返りもせずのリビングを出ていった。

24 置き手紙

志乃は床の上から動こうとしなかった。しかし高堂が部屋を出ると、両肩が小刻みに震え始めた。

こんな場面に立ち会ってしまった人間としては、どんな行動が適切なんだろう。

そう考えたのはほんの一瞬で、オレは踵かかとを返すと廊下に出て、高堂の後を追った。彼は靴を履いてやおら立ち上がるうとするところだった。玄関の間接光の下、深い陰影に縁取ふちどられた顔を見たとき、オレは追ってきたことを少し後悔した。

高堂と志乃。將軍と町娘の道ならぬ恋。だが、あろうことか將軍は町娘にフラれたのだ。そつとしておくのが武士の情けだろう。

しかしオレは言わずにいられなかった。

「志乃さんは……何度も『ごめんね』と謝っていました」

今じゃない、一昨晚の寝言だ。あれはまぎれもなく高

堂に向けた言葉だと今は確信している。

高堂はそれを聞いてもただウンウンと頷くばかりだった。オレはさらに踏み込んだ。

「ひとつ教えてください」

「なんだね」

「彼女は書き置きに何と書いていたのですか？」

高堂は上着のポケットをまさぐり、二つ折りの紙を取り出しとオレに示した。そこにはこう書かれてあった。

『ホントのさよならダヨ ギイちゃん。』

志乃猫はアナタのいないお空に飛んできます』

まったく泣きなくなるほど志乃らしい字面だ。書かれた内容は、あの夜キャットウーマンに扮した志乃こそが実はビルの屋上から飛ぼうとしていたのでは、という考えにオレを導いた。それはリストカット痕と重ね合わせると、さらに説得力を増す。

「志乃ちゃんは、自分が死ぬときは全身タイツを着て、美しく踊りながら死んでやるなんて戯言をよく口にしていた。ここ二、三年は劇団でも不遇をかこっていて最近^{ふさい}は塞ぎがちだったしな」

オレと志乃の出逢いは、お互いともないものだっただ。

「あなたほどの人の力を以てしても、彼女を支援するとはできなかったのですか？」

「君い、志乃ちゃんがそんなことをされて喜ぶと思うかい？」

……思わない。

「それにあのコには役者としての演技は無理だ。これをしおにスツパリ諦めるあきらるのが賢明だろう」

それだけ言うと、じやつと手を挙げて、高堂はドライなほどあつさりと玄関口から外に消えた。

さまざまな謎がここへ来て一挙に解明された。それぞれが悲しい思いを抱きながら、次へ進むために心の血を流している。志乃が高堂を殴ったことだつて二人の間を精算するためには必要不可欠な儀式だった。そう思うしかない。

高堂儀作は最後までスターだった。オレがいたからでもないだろうが、一切取り乱すことなく別れ話を受け入れた。志乃への未練などなかった、頭の中はもう次の女のことदैいっぱいだ、などと冗談にも考えたくない。

足先にコツンと硬いものが当たった。携帯電話だ。高堂が座っていた辺りだ。彼のだろう。オレは拾い上げると、靴をつっかけて外に飛び出した。

高堂はエレベータの前にいた。

壁面に手を突いて静かに咽^{むせ}び泣きながら。

高堂儀作。あなたの一挙一動は決して忘れない。

オレは自分の気持ちを抑えて近づくと、高堂のポケットに素速く携帯を落とし、脱兎^{だつと}のごとく駆け戻った。

カチャリと閉じた扉に凭^{もた}れ、破裂しそうな心臓の鼓動を数えながら思う。こんなクライマックスばかりの映画なんて、観てる方が卒倒してしまう。

25 ポケットの中

リビングに戻ると志乃の姿はなかった。玄関へとつて返し、奥の寢室を窺^{うかが}うと、彼女は再び衣類の整理に没頭していた。

「手伝おうか？」

志乃は腫^はれた目をしながら、ウンと頷^{うなず}いた。

「そっちの赤いバッグ、ちょうだい」

言われるまま足許の赤いバッグを掴^{つか}み、志乃の側に行こうとしたが、絨毯^{じゅうたん}の上はベッドの上に乗り切らない洋服や鞆、雑貨などで一面に覆い尽くされていて足の踏み場がない。

服は色とりどりのワンピースやスカートが所狭しと並んでいて、ある種、壮観ともいえる眺めだ。その横には野球帽やニット帽が山をなしている。フリーマーケット

が開けるぞ。

「本棚の中のん、バッグに突っ込んで」

あまり言葉を知らなさそうな志乃が本を読んでいたのは少々意外だった。それでも冊数はボストンバッグ二つに収まるほどしかなく、半分はマンガだ。『NANA A』？『ハッピーマニア』？ 知らんなー。

俺たちはほとんど私語を交わすこともなく、てきぱきと荷物をまとめていった。

そのうち志乃が妙な声を発し始めた。ウーンだとかアレーだとか呟^{つぶや}きながら、絨毯の上を腰を屈めて這^はいずり回っている。

「どうした？」

「あたしのいっちゃんお気に入りパンツがないねん。むっちゃん可愛いやつやねんけどなあ」

男の前でパンツ云々というのも色気のない話だ。まるで犬が鼻を鳴らすような格好で搜索を続けている。オレはため息をつきながら、腰に手を当てて伸びをした。

その時ジーパンの尻ポケットに違和感を覚えた。手をつ突っ込むと出てきたのはあろうことかパンツだ。広げると猫が拗^すねた表情でこちらを睨^{にら}んでいる。そういえばさつき志乃が部屋を出るときオレに手渡したのを、そのまま突っ込んでいたのだ。

志乃はそんなオレに気づき、大声を張り上げ、

「返せー!! あたしの勝負パンツ!!」

鼻の穴も全開に飛びかかってきた。問題のパンツをオレの手から奪還すると、勢い余ってベッドの上にダイビングする形になった。ために鞆やトランクに収納されるのを待っていた色とりどりの衣類や小物がすべて宙を舞った。

スカジャンの刺繍に照明が反射してラメが七色に光っている。まだ出逢って数日にしかない志乃とオレのこれからは何色だろう。

そんな思いをよそに、志乃は「ぐえ」と喉から舌を出して咳き込んでいる。陶製の猫型貯金箱で腹を打ったらしい。

「大丈夫か？」

志乃は奪い返したパンツを天井に向けて笑い出した。つられてオレも笑った。

「ぐええ」

今日も色気のない声を発したのは志乃。後輩の女の子らが前途を祝福しようと蒔いた花吹雪を飲み込んだのだ。

「デカイ口、開けてるからだよ」

「どうせあたしは人間掃除機ですー」

あれから二週間、ついに東京を去る日が来たのだ。志乃のマンションから三往復して運び出した荷物は、その

間オレん家の奥の部屋を占拠していたが、先日引越しの先発として大阪へ送られた。今オレと志乃を見送ろうと集まってくれたのはお世話になった河辺さん、綿貫管理人、そして志乃の後輩である女の子たちが約二十人。「志乃さん、スゴく明るくなりましたよー。菊池さんのおかげですねー」

女の子の一人が言った。

ここんとこ最後の仕事で忙しく、ろくに話もできなかったが、志乃は見違えるほど顔色がよくなり、足の怪我也すっかり癒えたようだ。

26 さらば東京

「車が到着しましたよー」

ざわめきがひとときわ大きくなり、志乃の周りに押し寄せた女の子たちは、彼女を握手責め、ハグ責めに行っている。この朝、彼女らは何を置いても、大阪に帰る志乃を見送ろうと駆けつけたのだ。それだけでなくこの二週間、毎晩彼女は送別会と称して飲み会に担ぎ出されていた。志乃の人望の深さが窺い知れるが、ややお疲れ気味にも見える。オレなんて河辺さんと飲み明かしたのが、わずかに一晩というのに。

「面白そうなコだね」

河辺さんがオレと並んで、志乃を評すると、

「私も最初は戸惑いましたが、氣立てのいい女性ですよ」

横から綿貫管理人が言い添える。

「トシー。出発するよー」

もみくちやにされながら、志乃がオレを呼んだ。いつの間にか「トシ」と呼ばれることに慣れてしまった。オレは河辺さんと管理人に改めて礼を述べると、リュックを肩に車へと近寄った。運転手はやはり志乃の後輩の男の子で、オレたちを東京駅へ送るため、わざわざ用意してくれたのだ。しかしなんだってオープンカーなんだ？

「志乃さん、トシさん、バンザーイ」

声を揃えた万歳三唱が巻き起こる。アパートの住人たちが戸口や窓から顔を出して眺めている。さらには通りを行き来する人たちが、遠慮のない視線を投げてくる。かなり恥ずかしい。

しかし恥ずかしいのはこれで終わりじゃなかった。オレたちが後部座席に乗り込み、いざ走り出すや騒々しい金属音がカラコロと鳴り始めたのだ。

「な、なんだナンダ？」

声を裏返して辺りを見回すオレに、運転手の男の子が笑いながら答えた。

「ちよつとした心尽くしです」

呆れたことに、音の正体は車の尻に紐で結わえ付けられた空き缶だった。

新婚旅行じゃないっつーの!!

「あはははは、やってくれるわー」

志乃は大喜びだが、オレはたまらず頭を抱えて、身体を座席に深く沈めた。

ベルが鳴り、新幹線は静かにホームを離れていく。オレはようやく人心地つくことができた。

今の今まで大変だったのだ。オレたちを東京駅まで送り届けてくれた男の子は、そのまま名残惜しげにホームまで付いてきたかと思うと、突然「姐^{ねえ}さん、姐さん」と号泣し出したのだ。そのため、新幹線が発車時間ギリギリまで、志乃が彼の肩を抱いてベンチで慰めていた。

「久しぶりやね。トシとこうやって話できるの」

ホームに向かつて手を振っていた志乃が、オレの方を振り向いてそう言った。

「だっておまえ毎晩午前様で飲み歩いてただろ」

「じゃあないやん。みんなおごったるて言うてくれるんやから」

「それでも限度があるよ。今朝、胃薬飲んでたじゃないか」

「アラ見てたのねー」

「それにさ」

オレは大きく溜息をついた。

「あの男の子も大概たいがいだぞ」

目の前に駅弁が積み重なっている。志乃が何でもええよと言ったためか、彼は売店の前で迷った末、五種類ずつ計十個の駅弁を買ってきたのだ。

「気持ちよ気持ち。ありがとうございます」

そう言って志乃は駅弁の山を拜んでいる。

「その気持ちを、どうするよ？」

「決まってるやん。食べたげな」

言い終わるや、手を伸ばしてまず一番上の折り詰めを解ほどき始めた。オレも観念して手を伸ばした。まだお昼には程遠いというのに。

新幹線はぐんぐんとスピードを上げていた。

27 祖父の会社

車窓を流れる風景を見ると、長かった東京での生活がまるで夢まぼろしのように思えてくる。これから向かう大阪では何が待ち受けているだろう。西行きは本当に吉と出るのか？

「なあトシ、アンタんとこのおじいちゃんて、一人で会社大きくしはったんよな」

まずは鰻弁当を軽く平らげた志乃は、次はどれにしよ
うかと思案顔で訊ねてきた。

「ああ、それまで小さなお店だったのを、一代で大会社
にしまったんだから、やっぱり大した人なんだよな
あ」

「何作ってる会社やの？」

「洋菓子」

「へー。おっしゃれー。名前は？」

「鷺村製菓」

「わしむら……？ えー………っ!!」

志乃の絶叫が車内に響き渡った。いくつもの顔がこち
らに非難の視線を向けた。

「それって、ひよっつとして、あのワシムラ？ 天使
のプディングの？」

「知ってたか」

「そらそうよ!! 去年、代官山店がオープンしたとき、
あたし並んだんやから!!」

志乃は椅子を激しく揺らし、手足をバタバタさせなが
ら全身で興奮を表現している。

「そうと知ってたら後輩らと、アンタ先頭に立ててお店
へ乗り込んだったのにな。この御方おかたをどなたと心得るー。
恐れ多くも、えつと、じいちゃんの孫であるぞー」

「それじゃ判らないって」

「タダでなんぼでも食える人ぞー」

「食わない」

「そやかてアンタ、小さい頃からケーキとかプリンとか、食べ放題やったやろ？」

「まあ周囲にいくらでもあつたからな」

「„天使のプディング”も、たんと食べた？」

「それなりに」

「めっさ悔しい。だってあたしさ、女優として成功したら食へに行こうと思って頑張ってたんやで。あの頃それぐらいスゴい人気やったんやから。東京でも常に人気洋菓子ナンバーワンで。そやのになんでよ。なんで急に製造中止よ!？」

今度は鼻息も荒く突っかかってくる。まるでオレが中止させた張本人だと言わんばかりに。

「待ってくれ、オレは関係ないよ」

「あるやん。孫のくせに」

「孫だったって、じいちゃんはオレに味覚の才能なしと見切ったから、就職先に困つてるときも、自分の会社には入れてくれなかったんだから。それにオレ、甘いもんはあんまり好きじゃないし」

「ゼイタク者お」

志乃は二つ目の駅弁の蓋を開けると、焼売を一個つかんで、ポイと口に放り込んだ。

贅沢だなんて心外だ。言われっぱなしも癪なので、シリアスに話を続けることにした。

「プリン製造中止も親子関係を悪化させた原因の一つなんだ。じいちゃんがある日突然止めると言い出したんだから。息子ら重役連にとってはまさに青天の霹靂さ。^{へきれき}

“天使のプディング”は誰もが知ってるWASHIMURAの代名詞だったもんな」

「そうそう」

志乃が大きく頷く。

「じいちゃんはそれ以前から、息子たちが洋菓子全般に事業を拡大するのを快く思ってなかったんだ。誰にも真似できない究極のプリンで身を立てたじいちゃんとしては、生涯プリンだけに我が命を捧げたかったらしい」

「一途なおじいちゃんやねー。カッコええ」

じいちゃんが褒められるとうれしい。もしどちらの味方かと問われたらオレは迷わず「じいちゃん」と答える。電話で大阪に戻ることを告げた時、じいちゃん、心から歓迎すると言ってくれたし。

28 富士山

「見て見て、富士山や。きれいなあ」

最後の焼売をつまんだ箸で指し示す先には、なるほど

好天に恵まれて、富士がその偉容をあますところなく見せている。

そのまま焼売を口に運んだ志乃は、弁当の折りを閉じた。とうとう二つまで完食しやがった。見てるこっちの腹具合がおかしくなりそうだ。食い物の話から離れたい。「なあ、今後のオレたちの活動方針について、話し合わないか？ 当面の予定ぐらいは考えておかないと」

「さんせー」

「志乃は、東大阪の実家に帰るんだったな」

「うん。お母さん、寿司買^ちうて待ってるって」

思わずゲップが出そうになった。

「トシは確か、明日がもうおばあちゃんの三周年記念日やったわな」

「三回忌と言ってくれ。なんだかお祝いするみたいに見えるよ」

「サンカイキ？ それかて似たようなもんやん。カイキ祝いって言うぐらいやから」

「全然違うー!!」

頭がおかしくなりそうだ。

通路を売り子がやってきた。志乃はビールを二つ買い、乾杯しよ！ と一つをオレの前に置いた。

カチンと缶を鳴らして口を付ける。染みいる喉ごしがたまらない。……こんな物見遊山な観光気分でいいんだ

ろうか。将来の目算も立たないというのに。

「そんなムズカシイ顔してやんと。富士山みたいにデー
ンとしとつたらええねん。デーんと」

それもそうか。今しばらくは。

「ほんで明日は、ばあちゃんのために親族一同が全員集
合するんやったね」

「ああ、あのばあちゃんのためだからね。仲の良いも悪
いもなしさ。オレ、その席をビデオで撮影しろってじい
ちゃんに頼まれてるんだ」

「え、ほんまに」

「ちゃんとバイト代払うからしつかり撮れってさ。あの
親子たちだから、またひと悶着起こすんじゃないかと気
が気じゃないんだけどね」

「あたしも行くわ」

「志乃が？　だって親族だけ……」

「アンタの撮影初仕事やろ。それやったらおっつけ役の
あたしがおらんと」

「お目付？」

「そう、それ。憧れのおじいちゃんにも会えるし、ちょ
うどええやん」

「プリンは出ないかもしれないぞ」

「うそー。そんなイケズやわ」

両手で自分の顔を挟んで、唇を尖らせる志乃。

「本当に来るのか？」

「行く行く絶対行く。おじいちゃんに伝えといて。あなたのファンの美女がご挨拶に伺いますって」

新幹線はトンネルに入った。ゴーツという音が耳を聾^{ろう}する。

言い出したら引かない聞かない止まらない女。まさか皆の前で場違いな言動をとったりはしないだろうが。若干の不安がつきまとう。

トンネルを抜けた。空はどこまでも青く、見渡す限りの緑の丘が目に見えやかだ。

逆に、彼女の存在が、ギスギスした場をやわらげてくれるかもしれない。いやきつとそうなる。そう信じたい。

三つ半。それが新大阪に到着するまでに、志乃が腹に入れた駅弁の数だ。「負けた」と連呼しながらも苦しそうに胃のあたりを押さえている。オレが自分の残した四箱を持てあましていると、

「いらなかったら、もううてくわ。お母さんにあげるねん、東京土産ですーって。アハハハハ」

オレたちは梅田で別れた。

さあいよいよいいちゃんとの再会だ。

門構えは、三年前、最後にくぐった日と何ら変わることなく、オレを出迎えてくれた。

『鷺村』^{わしむら}という分厚い表札も懐かしい。じいちゃん自身の筆によるもので、門番のように四十年間ずっと表通りを見おろしてきた。

オレは門の中へ足を踏み入れた。

大阪市内から約二十分の郊外。閑静な住宅地の中に、鷺村家はある。昔は農村地帯だったこの辺りも、昭和の高度成長期に宅地化の波が押し寄せ、田畑に小川といった風情はすっかり影をひそめてしまった。それでもこの門の内側には失われた風情が十二分に残っている。

門を入ってすぐ目に付くのは、立派な松だ。素晴らしき枝振りは鷺村家の自慢の一本である。その向こうに右手奥へと続く庭園がある。ここからでも築山や泉水、そして大きな石が適度に配置されているのが眺められる。

目を正面に戻すと、本瓦葺き二階建ての母屋が翼を広げている。周囲の町並みの中で、江戸時代の建築様式を残すのはここだけだ。途中幾度か補修や改築がなされたとはいえ、ほとんど創建当時のまま。敷地にしても、ご先祖様が住み着いた頃と同じで、決して広くはない。

じいちゃんほどの成功者なら、もっと広くて交通の便の良い場所に移ることだってできたはずだ。

でもじいちゃんは口癖のように言う。

『人間は、常に身の丈の七割ぐらいが丁度いい』

オレや周囲の目には、五割にも満たないように見えるんだが、じいちゃんは気にしない。元々、生活面での変化は嫌う人で、だからこそ屋敷も庭の風景もじいちゃんが子供時代のままなのだ。

しかし、これがお菓子作りとなると様子が異なる。じいちゃんは変化しないことを嫌い、常に洋菓子界に新風を巻き起こし続けてきた。

鷺村家は、江戸時代から続く和菓子の老舗だった。ところが第二次大戦後の物資が不足した時代、店の経営が立ち行かなくなったとき、偶然に知り合った進駐軍の家で食べさせてもらったプリンに感激し、一気にハマったらしい。

日本にプリンが伝わったのは明治時代だという。でもじいちゃんは従来の和製プリンの味に満足してはいなかった。

ハマってからというもの、じいちゃんは日夜、屋敷内の厨房で研究を重ね、ついに誰もが賞賛する味を作り上げることになる。これが世にいう“天使のプディング”だ。

和菓子の老舗がプリン！　ということで、当時、驚き

を持って迎えられたが、その美味しさにすぐ人気が爆発、誰が言うともなく付けられたニッケネームが、この“天使のプディング”で、それがそのまま商品名になった。

「ただいまー」

土間から奥に声を掛けると、返事の代わりに、ドスドスと足音が迫ってきた。

「やつと帰ってきたか」

じいちゃんだ。いきなり現れた。お菓子作りは体力だという自説を体現するような骨太で引き締まった身体を和装に包み、円^{つむ}らだが眼力の鋭い目、団子^{つゆ}つ鼻、大きくてきかん気の強そうな口許、これにゲジゲジ眉毛が丸顔の上に整然と散らばっている。髪は既がない。こんな造作だから、にこやかなときは泣いた子が笑い出す好々爺^{こうこうや}だが、一度火がつくと鬼ですら詫びを請うという。

鷺村勘兵衛^{かんべえ}。七十二歳。現役のパティシエである。

もつとも本人は“プリン職人”と自称している通り、あくまでプリン一筋なのだ。

じいちゃんは、土間に立ったままのオレの手を取って引き寄せると、何度も肩を叩いた。

「ゆっくり休め。わしはこれから寄り合いだ」

そう言い残すと、草履を履き、アツという間に表に飛び出していった。

30 プレゼント

「旦那様ー」

屋敷の奥から別な声がした。

「やあ、坊ちゃん、おかえりなさいまし」

小走りに出てきたのは、長年じいちゃんのお抱え運転手を勤めている多々良^{たたら}さんだ。

「うん、帰ってきちゃった。またよろしく」

「はい、よろしく」

多々良さんはオレに向かって丁寧にお辞儀すると、あわてて靴を履いた。

「じいちゃんが寄り合いだって？」

「会議ですよ。夕方には戻りますので、久しぶりにお相手してあげてください」

言い残すと、じいちゃんの後を追って車庫へと駆けていった。もう五十代半ばだと思うが、せっかちなじいちゃんと付き合っていると足腰が鍛えられそうだ。

庭に面した廊下を渡っていくと、いいにおいが漂ってきた。引き寄せられるように台所に入る。

「あれま、坊ちゃん、おかえりー」

元気な声は多々良さんの奥さんだ。やはり長年鷺村家

の家事一切を取り仕切っている。

「お文^{ふみ}さんも変わらないね」

「よお言わはりますわ。東京行って口ばかり上手になりはって。何人女子^{おなご}を泣かしたことやら」

お世辞に聞こえたらしい。見たままを口にしたんだけど。そういうえば若干腰回りが……。

「このにおいは、おでんだね」

オレは話を逸^そらした。

「はいはい。坊ちゃん的大好物やから、あんじよう煮込んどけて旦^{だん}那樣が」

白い前掛けは、昔から変わらず、お文さんのトレードマークである。

「そうそう。早く、お部屋に行ってごらんなさいまし。ビツクリしはるわよ」

そう言つて、おたまで二階を指し示した。

自分の部屋に入つたのは七年ぶりだ。ばあちゃんの葬儀の時には、屋敷の敷居^{また}を跨ぐことなく東京へとんぼ返りしたんだった。

部屋の様子は大学を卒業した時のままだった。勉強机や本棚の上にはチリ一つない。お文さんがせつせとはたきをかける姿が想像される。

八畳敷きの畳の三分の一は段ボール箱で埋まっていた。

東京から送った荷物だ。まずは明日使うビデオカメラを取り出さなきゃ。大学時代に使っていたものだが、東京ではほとんど使う機会がなかった。荷造り前に確認したらちゃんと動作したので大丈夫だろう。ビデオテープだけは買いに行かなくては。

見慣れない箱が目に入った。机の上に置かれたそれは、オレが送ったものじゃない。

リュックを畳の上に置き、近寄ってみると、箱の横に印刷された文字が読めた。と同時にオレは握り拳を作ってオオオと雄叫びをあげてしまった。

V社製のビデオカメラじゃないか!!

昨年発売されたばかりの、家庭用としては初めてのハイビジョンカメラGR―HD1だ。

箱の横に封書が添えられている。中の便箋を取り出してみると、こう書いてあった。

「カメラ贈呈する 明日の撮影頼む 勘兵衛」

他にテープが十本。堅牢な三脚もある。どうやらオレが実家に戻ってきたお祝いの意味も含まれているらしい。早速箱を開封したオレは、日が暮れるまで取説を読みふけた。

「さあ、飲め飲め」

じいちゃんはお銚子を持って、しきりに勧めてくる。

オレもイける口なので逆らわない。

夕餉^{ゆうげ}を囲んで座敷に集まったのは、他に多々良さん夫妻だけ。なんともささやかな夕べだ。

寄り合いで議論が紛糾したらしく、じいちゃんの顔は、帰宅した時から既に真っ赤だった。